

親種寺と田尻家

東山代町大久保

田尻家の菩提寺で、親種の子田尻丹後守鑑種あきたねによって、元亀元年六月二十三日、親種が筑後田尻村の鷹尾城で病没したので、城中に親種寺を建立したのが始りである。

その後天正十七年筑後鷹尾城から鑑種によって現在の地に移され、郷土の逸材、名僧不鉄柱文和尚を開山に請い、田尻家の菩提寺としその一族と共に檀信徒の寺として今日に至っている。本堂の裏山には田尻家歴代当主の墓石を始めその一族の五輪塔や、歴代和尚の無縫塔等が整然と建立されている。親種の墓碑は自然石でほぼ中央に建てられ、「玉雲院殿前伯列太守大倫竜喜大居士」の十六文字の戒名が刻まれている。

さて田尻家の祖先を尋ると、遠く漢太祖高皇帝に始まるとされている。後漢十一代靈帝の末裔、阿智王は斎明天皇の御代に来朝しその子高貴王は朝廷にまみえ、二子に大藏、坂上の姓を賜り国政に参与し、幾多の功があった。亦その子孫は天慶の乱や源平の戦に功をたてた。阿智王から二十二代原田種成ねしなり代となり、種成に五子があって三男を実種さねたねと云い、筑後田尻村にあって、田尻の姓を始めて名乗り筑後一帯の国造に着手した。親種は田尻の始祖、田尻実種より下ること二十一代目に当る。親種は天文三年十二月瀬高庄鷹尾に新城を築き武勇の気性と知略をもって筑後一帯を傘下に置いた。当時九州では大友・島津・龍造寺を三豪将と云い、就中大友宗麟は九州六ヶ国の太守としてその威力は随一であった。その大友宗麟が最も恐れたのは筑後鷹尾の田尻であった。しかるに天正十年八月龍造寺、鍋島の計略にあい、敗れて龍造寺に下り、後に鍋島の天下となり、鑑種は迎えられて鍋島の臣となった。その後鍋島勝茂の子元茂、支藩小城の初代藩主となるに及び小城藩に仕え筑後より山代の地に移封され、山代東部一帯を与えられ、小城に上屋敷、大久保に下屋敷を構えこの地に住むことになった。

